

吉澤誠一郎 『愛国主義の創成 ナショナリズムから近代中国をみる』

川尻文彦

本書の著者吉澤誠一郎氏は30歳代半ば、新進気鋭、現在注目の歴史家である。本書は天津の社会史を扱った前著『天津の近代 清末都市における政治文化と社会統合』（名古屋大学出版会、2002年）に続く第2作である。前作は専門家向けの重厚な実証論文の集積といったおもむきだが、今回は一般読者を意識した読み物としても想定されている。

本書のテーマは「近代世界を覆った最大の事象のひとつ（本書扉）」ナショナリズムである。もしかりに我々に「近代中国におけるナショナリズムを論ぜよ」との課題が出されたとしたらどのような回答がありえるだろうか？ 近現代中国におけるナショナリズムについては、英文、中文によるものも近年は少なくなく、また日本人学者によるものだけでも本書に引用されている村田雄二郎氏のものをはじめ、最近では坂元ひろ子氏のもの（『中国民族主義の神話 人種・身体・ジェンダー』岩波書店、2004年）など多くの論考がすでに発表されている。おそらく研究者の数だけ切り口、回答がありえると思われる。本書は上の課題に対する吉澤氏独自の角度からの答案であるといえる。

1

本書の構成は以下の通りである。「はじめに 梁啓超のアメリカ紀行」、第1章「愛国主義の歴史的位相」、第2章「同胞のために団結する 反アメリカ運動（1905年）」、第3章「中国の一体性を追求 地図と歴史叙述」、第4章「辮髪を剪る 尚武と文明への志向」、第5章「愛国ゆえに死す 政治運動における死とその追悼」、終章「愛国主義の論じかた」。第3章以下それぞれ反アメリカ運動、領域観念と歴史意識、辮髪論、革命運動と死の意味を論じる。既発表の論文を分かりやすく再構成したもので、一部の読者にとってはすでに馴染みの論考が多いと思われる。

以下、簡単に内容を紹介する。「はじめに 梁啓超のアメリカ紀行」は本書の導入である。1903年、数えて31歳の梁啓超は華人社会、アメリカの政治制度の視察のために渡米し、ヴァンクーヴァーに上陸、新大陸を横断し、ニューヨーク、ボストンなど東部諸都

市から中部・カリフォルニアの各地を訪問する。その記録が『新大陸遊記』(1904年)である。吉澤氏は、同じく外国人としての立場からアメリカを観察したトクヴィル Alexis de Tocqueville 『アメリカの民主政治』(1835-40年) 今日にいたるまでアメリカ論の古典の地位を保っている」と『新大陸遊記』との比較の視点を提示し、トクヴィルは民主政の問題に、梁啓超は亡国の回避に関心を集中している点を指摘する。それはとりも直さず、梁啓超だけではなく当時の中国の知識人にとって「亡国」の回避が最大の関心事であったことを示している。梁啓超の実感した亡国の危機意識を乗り越える道として、中国ナショナリズムといわれる思潮が模索され、「民族主義」「国家主義」「国民主義」「愛国主義」などと表現される思潮が急速に形成されるという。

「愛国主義の歴史的位相(第1章)」は「愛国主義」成立にかかわる清代から近代中国にいたる歴史的な文脈を概観する。満州族の王朝清朝は19世紀になると対外的な危機に見舞われ、日清戦争を機に知識人たちの危機意識が高まった。20世紀初頭には周知の通り立憲派と革命派の間のはげしい論戦が繰り広げられたが、吉澤氏は両者の政治路線の違いを超えて共有されていた発想や時代を画する意義に注目する。20世紀最初の10年をもたらした政治意識、社会思想の急速な変化(以下の章で詳述)のひとつがナショナリズム思想。吉澤氏はナショナリズムを中国語、日本語それぞれの文脈で「国民主義」「国家主義」「民族主義」などと言い換えてもたいして明晰な議論をできないとしてひとまず「愛国主義」と称して議論を進めるのである。そのなかで「国民」概念がますます強固なものになっていく。その理由としてジャーナリズムの発達、進化論の影響を挙げる。嚴復が『天演論』で紹介した生存競争と自然淘汰の説がなぜ清末の思想史において決定的な意義をもったのか。それは生存競争の単位＝「群」(通例「社会」と訳される。これは「国民」と容易に結びつく)を設定する発想ゆえではないのかと興味深い指摘をする(32頁)。また清末に導入された通俗的人種概念に依拠し「滅種」の危機が叫ばれたのも「愛国主義」をかきたてることになったという。

「同胞のために団結する 反アメリカ運動(1905年)(第2章)」では、「中国人」という語が頻りに用いられるようになった1905年の反アメリカ運動を分析する。1848年の金鉱発見によるゴールドラッシュで、移民の本格化、サンフランシスコに集住するようになる。労働市場をめぐる軋轢もあってじょじょに華人排斥への動きが活性化し、82年から移民の禁止へ、ついに04年、移民禁止の条約の延長を譲らず、学生、商人なども華工とみなされて入国が困難になったり入国の際の検疫が屈辱的であったりして、1905年の運動につながっていく。『アンクル・トムの小屋』*Uncle Tom's Cabin*の中国語訳を通して黒人奴隷との類比で華工の悲惨さが認識され、『新大陸遊記』の附録「記華工禁約」はボイコットのアイデアの初出と見なせよう。特定国の商品を対象にしたボイコット運動は、1905年にはじめて確立した。吉澤氏は、広州、天津、上海の3都市をそれぞれ取り上げ、異なる様相を指摘する。広州では善堂を中心に「四邑」「三邑」をまとめる。上海では1904年に商会が成立し、広東、寧波など本籍をこえて展開する。天津では本地人が政治的な発言力を復

権させる好機となったという。移民問題という契機により愛国の観念がひろく流通したこと、各都市内部で分立した社会編成を乗り越えるのに愛国主義は適格的であり、その運動が商会、地方自治の発展に果たした役割は大きいとする（蘇州商会がボイコット運動と平行しながら形成され、上海の地方自治の制度化が同時期に進むのはその好例である）。

「中国の一体性を追求する 地図と歴史叙述(第3章)」では清朝を打倒すると列強の「瓜分」を招くという康・梁一派に対して「排満」の立場から反論を加えた革命派とともに「瓜分」をめぐる問題は大きな位置をしめていた。政治的な立場を超えて「瓜分」を成り立たせている議論の前提とは何か？ それは中国の領域とは守るべき不可分の実体だという発想 地理的な一体感、通時的な一体性であると吉澤氏は指摘する。地理的な一体感については、『大公報』『浙江潮』『新湖南』『江蘇』に見られる世界地図のなかの中国、中国地図の中の自分の省、それ以下の府県＝「郷土」、自己と全体社会の構図が醸成されていくという。

私としては清代には中国全土に関するある種の領域観念・「版図」意識はあったと思われる、それが近代以降の領域観念とどう連続し、断絶しているのか（私自身整理できていないのであるが、アメリカで知り合ったハーバードのある大学院生もこれを博士論文のテーマにしているらしい）、吉澤氏にうかがいたいところである。

通時的な一体性については「中国史」の創成を取り上げる。代表的な梁啓超の「史学革命」と章炳麟『中国通史』では章のほうが伝統史学を意識しているが、ともに「中国通史」を構想していた点に変わりはないという。歴史意識と密接な関係のある「紀年」については、康有為、梁啓超らの孔子紀年は、康有為の提唱する孔子教との関連があるので、革命派は賛同しにくく、革命派は黄帝紀年を劉師培がはじめて提唱、宋教仁も追随した。紀年は各人の歴史観ともかかわり様々なヴァリエーション（黄帝、堯、大禹、秦紀元等）があるが、いずれも中国の一体性をどう考えるかという思索に通じているという。

「辮髪を剪る 尚武と文明への志向(第4章)」は、なぜ辮髪を剪ったのか、その社会的、政治的意義を論じる。辮髪は反清朝の象徴、「排満」「革命」の意思表示、近代文明の伝播、「近代化」の一環、生活に不便、等、従来の説は様々だが、吉澤氏はそのような説明は一面的であるという。吉澤氏は辮髪を剪る動機は個人様々であることを踏まえたくえで、当時の人々の願望と戦略の問題から、全男性が辮髪を剪るべしであるという自覚的な主張に焦点をあてる。ある在日雑誌は、剪辮易服を行えば、人心を一新し、富国強兵の実を挙げ、外交問題の解決をもたらすことができると唱える（『湖北学生界』第3期、1903年）。剪辮論の先駆は譚嗣同『仁学』 「自強」のために剪辮は不可欠とする だが、剪辮の実践は1900年の章炳麟の「排満」の立場からの行動が有名である。しかし、この剪辮論は自動的にそのまま「革命」論に帰結するわけではなかった。その後、剪辮論は様々展開するが、1906年『大公報』懸賞論文「剪髮易服議」の諸議論を取り上げる。そこでは剪髮はおおむね身体的活動性を高め、精神能動性を発揮する前提となり、それゆえ国家的危機を克服するために不可欠とする。文弱な士大夫像を否定する傾向が見て取れるようにな

る。辛亥革命前夜の1910年には伍廷芳が辮髪を剪ることは必ずしも清朝に反対することを意味しないことを論じ、宮中、資政院において盛んに議論がなされた。禁衛軍すら辮髪を剪るようになり、学生、民間人の剪辮の動きは、押しとどめがなくなっていた。辛亥革命時期は一転して、革命政権にとって辮髪の有無は清朝と革命政権とどちらの支配下にあるかを表示する踏み絵の役割を果たすようになる。

吉澤氏によれば剪辮易服に対して賛成にせよ反対にせよ、今後の政治社会秩序のあるべき像と関係させて議論していたという(148頁)。伝統的に「風俗」は志ある者の働きかけによって改良しうるものとの考えから、「風俗改良会」等の社会改良運動と軌を一にしていた。そこでは、西洋や日本に由来する「野蛮」から「文明」へ、伝来の「夷」から「華」への二重の移行が見られ(152頁)、あるべき男性の類型として伝統的士大夫ではなく、身体的能動性に富んだ男性像、「尚武」の理想を強調される。端的には中国の軍事的強国化が願望の対象になっていたと結論づける。

「愛国ゆえに死す 政治運動における死とその追悼(第5章)」は「中国のための死」、追悼自体の歴史的意義を考察するユニークな論考である。いまなお謎にみちた譚嗣同の死について梁啓超「譚嗣同伝」では「烈士」譚嗣同、自ら死を選んだ同志として描かれた。この梁啓超の作り上げた「烈士」像は「追悼儀式」によってさらに拡散し、唐才常の刑死においても反復したという。吉澤氏は、譚嗣同、唐才常に対する追悼言説がもっていた恣意性・政治性を鋭く指摘する。「革命派」とされる陳天華の死についても党派を問わず幅広く追悼される(彼の死の意義付けは様々だが)。例えば『新民叢報』は陳の政治的な立場は暴力革命を避けようとしたものと解する。また1906年の潘子寅の死が袁世凱からも追悼されたことは、憂国の死を追悼することは革命集団に特有のことではないことを示している。吉澤氏はその背景に「国に忠たれ」のごとく、忠誠概念が再編されつつあったことを指摘する(185頁)。

暗殺者吳樾の死には(1905年)、自己犠牲の意義を高らかにうたい、悲憤慷慨、自らの死を強く願う言説が伴っている。清末の暗殺についてはロシア虚無党の政治思想の影響が重視されてきたが、吉澤氏は特定の政治思想・党派とのかかわりで論じることは難しいという。暗殺という手段を重視する革命方策は死に特別な意義を認める政治運動観と不可分であり、個人が歴史に果たす役割を強調する英雄主義、個人の主体的な投企という能動的な要素が濃厚であり、さらに一身を捨てて(個々の君主ではなく)国に尽くすという理念、気分の共有という側面を指摘する。欧米の近代史をはじめ古今東西の人物がしきりに肖像化されたのはそのような文脈からであるという。

次々に犠牲者をだし、その追悼を行うことで、「中国のために死ぬということ」という言説と実践の様式を清末の革命運動を通じて作り上げていったのである(中華民国の建国とともに体制化していく)。

「愛国主義の論じかた(終章)」では、清とオスマン帝国の比較を提示する。ともに辺境の小規模集団から出発、広大な領域、多様な民族、発達した官僚組織、西洋化の過程で創

出された軍隊により滅亡，間接統治の存在，等の共通点が存在する。にもかかわらず，重大な相違点は，清朝の版図がかなりの程度現在の中国の領域と重なっているのに対し，トルコ共和国ははるかに狭小であることである。これは当時の国際情勢，中華民国という枠組みが外国から必要とされたこと等の理由もあるが，歴史的にも地理的にも構成員の面でも中国は不可分の一体であるという発想，創成された愛国主義が確固としたものとしてあったからではないのかと吉澤氏は結論づける。

2

論旨を可能なかぎり忠実，正確にたどろうとしたためにいささか冗長な要約になったが，奇をてらわない平易な文体，明快な論理展開が全体として印象に残る。研究史にも目配りがきいている。

1890年代から1900年代にかけての20年弱，いわゆる清末を扱った研究書は，吉澤氏が指摘するように政治思想，「変法」史，「革命」史を扱ったものはいくつもある。本書では梁啓超に重要な役割が担われ（狭間直樹編『梁啓超 西洋近代思想受容と明治日本』みすず書房，1999年，の最新の成果も取り入れられている），本書で何度も強調されるように従来の党派別の政治思想史を打破しようと試み，それに成功しているとみなせる。

そればかりか，例えば小野川秀美『清末政治思想史研究』（みすず書房，1969年）は日本が世界に誇る清末思想史研究の金字塔であるが，それとほぼ同じ対象，人物群を扱いながら，これだけ違った角度からの豊かな叙述ができるものかと驚きを禁じえない。歴史学の奥行きを感じさせてくれた。オリジナリティーあふれる思想文化・社会史の成果といえよう。

もちろんこまかい粗を目をさらにして探すことも不可能ではないかも知れない。たとえば嚴復の「群」に対する理解（嚴復研究は巨大な蓄積を有する。最近のものでいえば，黄克武『自由的所以然 嚴復対約翰彌爾自由思想的認識と批判』中央研究院近代史研究所，1998年），「中国史」の成立についても検討すべき材料は多いのでは（例えば，王汎森『晚清的政治概念と『新史学』』『中国近代思想と學術の系譜』河北教育出版社，2001年，所収，等），清末の政治思想を論じるうえで欠かせないと考えられる思想家たち，例えば伝統思想に傾斜した劉師培（『中国国民約精義』1904年でルソーの『社会契約論』を紹介した），章炳麟（該博な学識で在日留学生に絶大な影響力を及ぼした。「中華民国」の国号のもとになった「中華民国解」1907年を著した）等にもっと紙幅を割くべきでは，との意見である。しかしそれらはないものねだりのような気がする。本書はそれらを補ってあまりあるほどの魅力を備えている。

ナショナリズムはこれまで様々に語られてきた。それにとまなう「国民国家」論は，一時期，非常な流行をみせた（代表的なものは，西村成雄編『現代中国の構造変動 3 ナショナリズム 歴史からの接近』東京大学出版会，2000年）。しかし，中国ナショナリズムが勃興したと広く認められる清末時期の文化・社会・思想に関する詳細な分析が加えられることは多くなかったように思われる。

またさらに、ナショナリズムを論じる際にはとかく国民的凝集を示す(と思われる)材料ばかり集めてきて論理を展開する(最初から目的、結論ありきの議論)という弊に陥りがちであるが、本書では当時の歴史的文脈の細かいひだ・実態に即した議論が展開できているように思われる(著者の言い方を借りれば、行きつ戻りつ「決然とした爽快でない」(217頁)叙述である)。

本書での吉澤氏の重要な主張の一つは、「国民国家」「帝国」概念を使用しないということである。「これ[20世紀初頭の中国知識人の営み]を「国民国家」への方向ととらえるのは、本書の意図ではない。そもそも、有史以来の国家形態を丁寧に考えることを放棄して、それをひとまとまりとして「国民国家」と対照するのは、あまり賛成できない概念規定である。もちろん「帝国」と「国民国家」という二項対立の説明の仕方も好ましくない(倒数20頁)」すなわち「帝国から国民国家へ」の単線的な歴史発展を見出すことは有効な分析視角ではないと考える。私も同感であるが、ではこれに代わるようなもののような叙述がありえるのだろうか。近年山室信一氏によって「帝国から国民国家」に代わる明確な「国民帝国」論が提示されているが(『国民帝国』論の射程, 山本有造編『帝国の研究』京都大学学術出版会, 2003年, 所収), 吉澤氏はこの「国民帝国」論に対してどのような反応を示されるのであろうか。興味のもたれるところである。

中国の「近代」は西洋列強による侵略「瓜分」と満州人による異民族支配という二重の圧迫を受けていた。二重の圧迫という当時の中国にとってあまりに過酷な閉塞的な状況のなかで、中国は「近代」に立ち遅れ、「近代」にもがき苦しんだ。従来の研究はこのような中国に対する内外からの圧迫を重視し、その圧迫をいかに乗り越えるかを多分に情緒的な形でありとあらゆるものの「否定」という過激な立場から思索した章炳麟、それに「網羅衝決」(「網羅を衝決する(つき破る)」)の譚嗣同らが好んで多分に共感をもって取り上げられてきたように思われる(西順蔵「中国近代思想のなかの人民概念」『中国思想論集』所収, 等)。章炳麟のいささか盲目的な「排満」も今日からみれば「偏り」を感じざるを得ないわけであるが、中国ナショナリズムのひとつの典型として取り上げられてきた(章炳麟→魯迅→毛沢東の系譜)。そもそも吉澤氏が指摘するようにナショナリズムとは情緒的な一面、「情念に訴えかけようとする」(18頁)性格を強くもつわけだが、本書を一読する限り「遅れている」わけでも「進んでいる」わけでもない中国の「近代」のナショナリズムに対して、吉澤氏はきわめてニュートラル、冷静な立場を貫いている。「普通の国」中国の「近代」の諸相を資料に即しながら淡々と分析したかのように見える。吉澤氏は中国の「近代」の質についてどのように考えておられるのだろうか。気になるところである。吉澤氏がかりに同じ東アジアの日本「近代」化に「成功」した「優等生」とされたの「愛国主義」を論じるとしたら、どのような論じ方をされるのであろうか。そのことが中国の「愛国主義」の特質を再確認する上でも有益な作業になるのではと思われるので、聞いてみたい気がする。

3

本書は実証面でも随所に重要な興味深い指摘があり、多くの新たな知見を得た。進化論を「中国」に適用したという従来の説明はやや不適切で、むしろ逆に団結して生存競争に勝つべき主体を求めて「中国」などの集団が想定された(34頁)。譚嗣同は獄に入ってもなお刑死を予期していなかった可能性への言及(倒数25頁)。広く流通している『辛亥革命前十年間時論選集』1巻『黄帝魂』テキストが、原著の人種差別的表現を意図的に改定している(倒数23頁)。無政府主義と暗殺との関係に再検討をもとめる(190頁)。人種観をめぐる張之洞と陳天華の間の共通性(40頁)。「革命」派とされる陳天華思想の位置づけ(170頁)等である。従来の通説を軽やかに乗り越え、覆していく痛快さがある。

繰り返しになるが、本書は従来の「立憲派」「革命派」等の党派史に偏した(政治)思想史を乗り越えることを試み、成功した。その際「亡国」回避の「愛国」という座標軸を提示している。さて私自身にとっても課題なのだが、20世紀初頭の思想史を「亡国」の議論

いわば「亡国」思想史 だけで描くことで十分なのかという問いがある。本書の主人公ともいえる梁啓超や本書でもしばしば引用される『民報』などの留日雑誌に登場するような「政論家」の議論は「亡国」を主たるテーマにしているのはいわば当然である。李沢厚式の「救亡が啓蒙を圧倒した」ではないが、「救亡」のテーゼに隠されてしまった諸側面、すなわち「亡国」の議論のほかに当時の人々のものの考え方や意識に当時の文脈に即しながら迫ることはできるのだろうか(思えば、梁啓超はじめ章炳麟、梁の師康有為ら「政論家」の本領は中国古典学者としてのものである)。例えば、学術・文化思想史、民衆思想史、地方知識人の思想史等、そのような多面的な「思想史」の可能性ははたしてあり得るのだろうか?

吉澤氏の論考を読んでいつも感心させられるのは、研究蓄積の多いいわば「正統的」なテーマについて研究史をしっかりと咀嚼・整理したうえで、自らの独自性あふれる論理を平明な文体で展開できる著者の学者として求められる能力の高さである。見習いたいものだと思っ(岩波書店、2003年3月、25+229p、2600円+税)。

*本稿は中国現代史研究会での例会報告(第81回、大阪外国語大学、2003年8月2日)をほぼそのまま文字化したものです。当日、貴重なご意見をいただいた先生方、院生の皆様に感謝いたします。

(かわじりふみひこ・帝塚山学院大学)